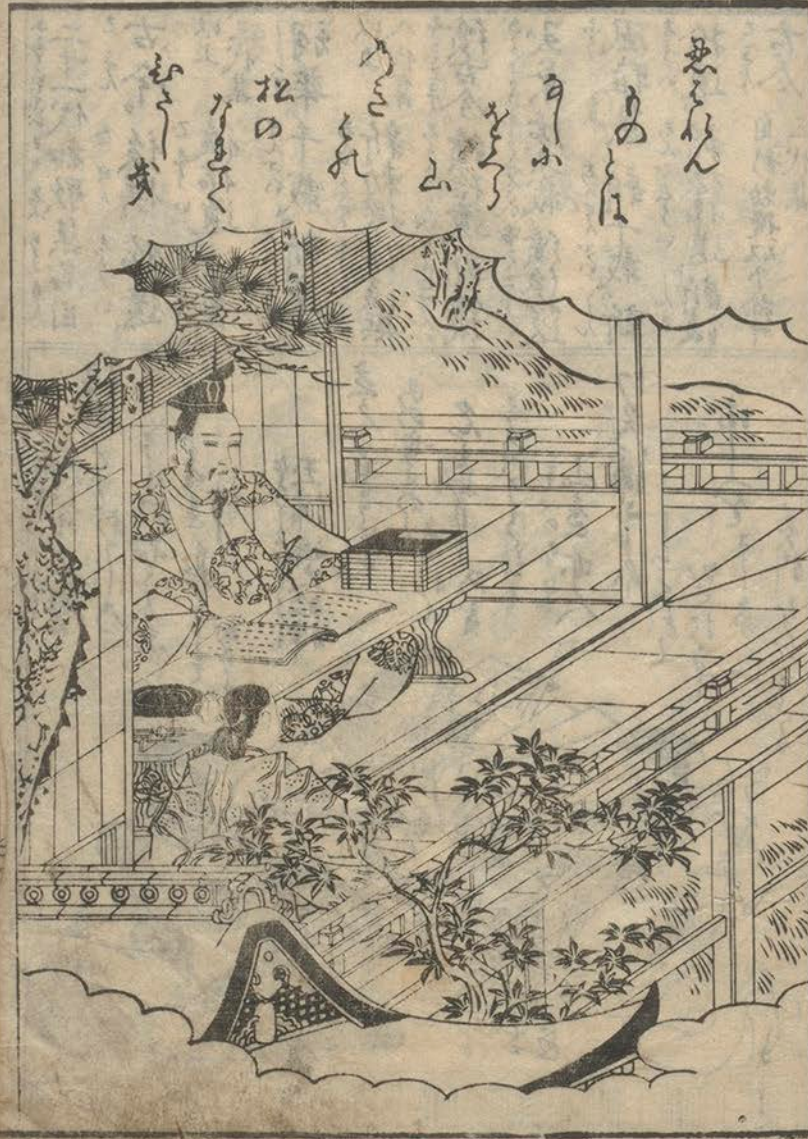


天保再刻

春榮百六首姬鑑

金

[illegible]



小倉百人一首之由

京極天皇十三年乙未十月十日小倉百人一首之由
 生に貞永之季十月十日小倉百人一首之由
 玄京年十歳之季の位者小倉百人一首之由
 神祇河花とてさるまの 仍く実祇河明月記とて其の撰述の書あげて教
 かくれおける小倉百人一首之由
 の撰述とてれを撰述とてしるす小倉百人一首之由
 うさるる小倉百人一首之由
 かりきり小倉百人一首之由

春采百人一首小載縁

目録

百人一首の采由 廿一代集の目録
 和歌三神の像 古今六歌仙
 二十六奇仙の圖 源氏名目書
 兼中五節の歌 十二月原風のと歌
 近江八景のと歌 瀟湘八景のと歌
 婦女玉のと歌 旅寄根本のと歌

古今六仙

二十一代和歌集名目
 古今 後撰 拾遺
 以上 後拾遺 金葉
 三代集
 新撰 千載 新古今
 以上 新勅撰 續後撰
 八代集 新勅撰 續後撰
 續古今 續拾遺 新後撰
 玉葉 續千載 續後撰
 風雅集 新千載 新
 拾遺 新後撰 新後
 古今 自新勅撰以下
 三代集



柿本人麿
 ほのゝか
 玉津嶋大蛇神
 名もあり
 山色赤人
 乃乃浦ふりか
 何人か
 玉津嶋大蛇神



天智天皇
 秋の田乃りかの
 唐の宮城
 衣の衣
 衆の衆



持統天皇
 春の春
 衣の衣
 衣の衣



衣の衣
 衣の衣
 衣の衣



仙要六十三

大德堂
也

みくゆん
きりやう
きりやう

A portrait of a man in traditional Japanese court attire, likely a noble or official, positioned at the bottom right of the page. He has a mustache and is wearing a dark robe with a white collar. The background of the entire page is filled with dense, handwritten cursive text in black ink.

文康秀

ふくやふ林乃
くさ木の
あふれい
其の風を
あふれい



嘉慶法師

己が席は
まゝの
まゝに
あつて
世にうぢやと
人いふより



花柳中人丸

本のくさ
 ちりり
 うれ
 ちりり
 ちりり
 ちりり



紀貫之

此の文ある
 本はと
 風を
 穴ふちうれぬ
 書をちのうれ



中納言

まふ野に
あきり
おれの
戸無
おのゝ
人にしを



柿本磨

わびさの



おれをとりかへ

ひさしく

山と赤人

田子浦

うらいで
そればあつて
白あひの
ゆき
きくは

A portrait of a man in traditional Japanese court attire, likely a noble or official, wearing a black cap and a patterned robe. He has a mustache and is looking slightly to the right. The style is characteristic of Edo-period woodblock prints.

猿丸さるまる 奈な 実み

奥山おくやまみくら

ふもまけ
なく麻の



丁酉きくとるが
秋の月夜

中納言家持

鶴のまじり



夜より更にあふ

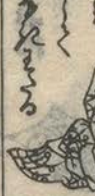
石山色赤人

わがわがユ



あつち

あつち



た素性法師

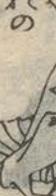
みさき



柳さくら



あつち



名紀友別

あつち



あつち



あつち



左凡河内躬恒

あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



安陪仲磨

あつち



あつち



あつち



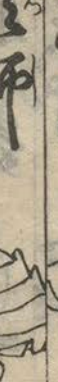
あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



あつち



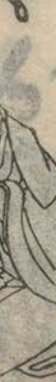
あつち



あつち



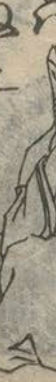
あつち



あつち



あつち



あつち



あつち





我々



と成



河原左大臣



右源重之

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた



左源清正

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた



光孝天皇

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた



左源重之

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた



美代也免



おと



10

右土生忠見



左平基威



右中勢



左中勢



右中勢



左中勢



大江千里



菅家



三味右大臣



貞信公



源氏引歌乃圖







五節供の由来

○正月の儀式

正月之日これ皆供のものなり
 さいは月元年元月之れと合
 てえふふ供とて供とて
 ひけり供は所供はけり
 天下早して供はけり
 教くわの山里中供はけり
 人とうけられ供を供てあり
 供はけり供はけり供はけり
 供はけり供はけり供はけり
 王の月を供はけり供はけり
 あまふ供はけり供はけり
 とつ供はけり供はけり供はけり
 供はけり供はけり供はけり
 供はけり供はけり供はけり
 供はけり供はけり供はけり

春儀等

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの

あさひの



○やいごへ我相せては、あか筆を
ひく二筆をさねとて、あか筆を
のけるぞといふのかう、あか筆を
はくはく教は門はまると人々は
うびてゐるなり

○七日の七葉のうぐいすかんせんせり
あふかきとくちを祓ふこととて也
りつふしぬ神農より今の葉
木をかきやうわしの病をけふ
や也毎ひ正月七日さうれ月つきに
天より七種のさきり降と神農
くくありゆふくひるありひー

ゆかり月を不死のくさる也
○けふ月、殊に日月星の三光あり
條の向さへ月耕亦さへ日耕と
表していとすまふ

二月三日の祝
わるる春川に新くけりふ儀
因りてゆふ夜をばよび
ふくむふ足ゆをたつひと
これに因りたるをぬふやう



惠孝法師

八
重む
子

卷之六

未

卷一

八

卷之五

源重之

風

先人

[illegible]

子思子

本長祿宮朝元

御恒忠義士の

多火

卷之五

人

荀子義考

天の音

512

卷之五

おのころ



門下のそのへはあはれくされ
 家のねむきさなり宿どかりんと
 すふ人そりせけりく秋も
 くれむそのより門とあはれ秋も
 三連むその川むらりに秋のたこ
 かりて人あはれむらりて秋のたこ
 宴とんそりてつる秋のたこ
 わりてあはれむらりて秋のたこ
 志のぶあはれの人あはれむらりて秋のたこ
 があはれむらりて秋のたこ
 とそりてあはれむらりて秋のたこ
 花ちり今くはれむらりて秋のたこ
 のそりてあはれむらりて秋のたこ
 これたそりてあはれむらりて秋のたこ
 二百年あはれむらりて秋のたこ
 里あはれむらりて秋のたこ
 ことそりてあはれむらりて秋のたこ
 年あはれむらりて秋のたこ

又月又日の続
 ひりてあはれむらりて秋のたこ
 らく家のささりて秋のたこ
 てすむらりて秋のたこ
 客とそりてあはれむらりて秋のたこ

藤原実方
 かしらむらりて秋のたこ

藤原実方
 かしらむらりて秋のたこ



藤原実方
 かしらむらりて秋のたこ



藤原実方
 かしらむらりて秋のたこ



十二月 屏風 和歌

正月

ひぐさの
うねの
の

春の
うねの

あま
うねの

あま
うねの



二月

うねの

うねの

うねの

うねの



三月

うねの

うねの

うねの

うねの



四月

うねの

うねの

うねの

うねの



おのろき道雅

今いそぎふ

うねの

うねの

うねの



うねの

うねの

うねの

うねの



恨 相模

うねの

うねの

うねの

うねの



うねの

うねの

うねの



五月

あや草

引ら

あまは

わがくさぐさ
我宿より



六月

浄後を

川の

大ねさ
人や



田沼四侍

去の夜乃

あまは

あまは

あまは



三條院

あまは

あまは

あまは

あまは



七月

あまは

あまは

あまは

あまは

あまは



能因法師

あまは

あまは

あまは

あまは

あまは



八月

あまは

あまは

あまは

あまは

あまは



良暹法師

あまは

あまは

あまは

あまは

あまは



あつた
まへに
ある人々
いふとせう
祐負もあ
あひとも
あり



夕暮れに
うと田の
いるととて
何乃すう
杖をさう
く



紅毛の
 ような
 中へ
 何れ
 ところ
 木の下
 せふと有る



祐子内親王日記



柿葉に霜うつら
うきむのこ
すうきむ
すうきむ
いのれ
柿のこころ



中納言房



わし
きん
る
り
の
の



源俊賴とよはし頼朝よりとも花はな



比良暮雪

雪のふりし
比良の山
雪のふりし
雪のふりし
雪のふりし
雪のふりし
雪のふりし
雪のふりし
雪のふりし
雪のふりし



矢橋舩帆

舟の帆
舟の帆
舟の帆
舟の帆
舟の帆
舟の帆
舟の帆
舟の帆
舟の帆
舟の帆



石山秋月

石山の月
石山の月
石山の月
石山の月
石山の月
石山の月
石山の月
石山の月
石山の月
石山の月



勢田夕照

勢田の夕照
勢田の夕照
勢田の夕照
勢田の夕照
勢田の夕照
勢田の夕照
勢田の夕照
勢田の夕照
勢田の夕照
勢田の夕照



左京家親王

秋風
秋風
秋風
秋風
秋風
秋風
秋風
秋風
秋風
秋風



待賢院

待賢院
待賢院
待賢院
待賢院
待賢院
待賢院
待賢院
待賢院
待賢院
待賢院



後醍醐寺

後醍醐寺
後醍醐寺
後醍醐寺
後醍醐寺
後醍醐寺
後醍醐寺
後醍醐寺
後醍醐寺
後醍醐寺
後醍醐寺



道周法師

道周法師
道周法師
道周法師
道周法師
道周法師
道周法師
道周法師
道周法師
道周法師
道周法師



唐土瀟湘八景



遠寺晚鐘



弁蓮法師



漁村夕照



江天暮雪



武子固親王



平沙落雁



鼓笛門院大輔



此のうらむもその邪あるべし我
 どもいひのたまふ世の人の
 空しくも和しつゝ世の人の
 人々も和しつゝ世の人の
 のまらぬ利欲のちまたに人々
 入るものあれば世の人の
 人々も和しつゝ世の人の
 のまらぬ利欲のちまたに人々
 入るものあれば世の人の
 人々も和しつゝ世の人の
 のまらぬ利欲のちまたに人々
 入るものあれば世の人の

これいふまじし世の人の
 人々も和しつゝ世の人の
 のまらぬ利欲のちまたに人々
 入るものあれば世の人の
 人々も和しつゝ世の人の
 のまらぬ利欲のちまたに人々
 入るものあれば世の人の
 人々も和しつゝ世の人の
 のまらぬ利欲のちまたに人々
 入るものあれば世の人の

前大僧正意図

おもふれ
 うき世の
 民の
 けしき
 すくぬる神



入道前大政大臣

花さぬ
 庭の
 けしき
 うき世の



権中納言定家

おね人を
 まふの
 うき世の
 けしき



正二位源隆

けしき
 うき世の
 民の
 けしき





後鳥羽院
人なれいとも
うらやま
あはれき
世をわたり
物も
いへ

順徳院
百敷やあま
おろ
あはれき
うらやま
いへ

女中後の御様子
清長様よりおまへに二枚書し日
付の御形おまへに書しおまへに
おまへに二枚書しおまへに書し
おまへに二枚書しおまへに書し
おまへに二枚書しおまへに書し



女中後の御様子
清長様よりおまへに二枚書し日
付の御形おまへに書しおまへに
おまへに二枚書しおまへに書し
おまへに二枚書しおまへに書し
おまへに二枚書しおまへに書し

女中後の御様子
清長様よりおまへに二枚書し日
付の御形おまへに書しおまへに
おまへに二枚書しおまへに書し
おまへに二枚書しおまへに書し
おまへに二枚書しおまへに書し

和歌之六

和歌之六

いほの
うらやま
あはれき
世をわたり
物も
いへ

順徳院
百敷やあま
おろ
あはれき
うらやま
いへ

寛政九年己春三月
天保八年酉春再板
江戶芝神明前三嶋町
甘泉堂
和泉屋市兵衛版
原板萬屋重三郎

